

初の女性総理大臣

高市早苗と

高市皇子



高市総理大臣への期待の声

1 女性首相の実現と多様性の進展

初の女性総理・総裁という点に対し、地域や政党関係者から「政治の世界でも女性のリーダーシップがようやく前進した」という歓迎の声がある。

2 被災地・復興対応へのリーダーシップ

福島県など震災・原発事故の影響が続く地域から、「福島の復興を加速させる手腕を期待する」という声が出ている。

3 物価高・経済課題への対応

与党側の協力を得た新体制に関し、物価上昇、生活コストの負担増など、国民の関心が高い経済課題をきちんと手当てすることへの期待が挙がっている。

衆議院 (総数465):

第一回投票で決着

高市氏	237票 (過半数)
立憲・野田氏	149票
国民・玉木氏	28票
公明・斉藤氏	24票
れいわ・山本氏	9票
共産・田村氏	8票

参議院 (総数248)

1回目は過半に届かず

高市123 / 野田44

→ 決選投票

高市 125

野田 46

無効 47

白票 28

自民 単独 衆196 / 参101 (※過半数に未達)

公明党が連立を離脱。自民は単独で、

衆 196 (過半233まで37不足)

参 101 (過半124まで23不足)

ここが今後の政権運営のポイント

政権の骨格―組閣・与野党配置と政治改革

新内閣の顔ぶれ

女性閣僚

財務相

片山さつき元地方創生担当相

経済安全保障担当相

小野田紀美参院議員

他の閣僚

総務相

林芳正官房長官

外相

茂木敏充元幹事長、

防衛相

小泉進次郎農相を起用

官房長官(内閣の要)に、木原稔前防衛相起用

維新は“閣外協力”／政策協定に署名

政権運営では、日本維新の会と「閣外協力」で合意(20日)。
維新は閣僚は出さず、12テーマの政策協定で協力。

「定数1割削減を議員立法で(’25臨時国会)」

高市総理と維新の合意には、

衆院定数を**1割削減**する議員立法を、
令和7(2025)年の臨時国会で提出・成立を目指す方針が含まれている。

これに対し野党からは順序への異論が出ています。

立憲・野田氏:「政治資金問題をうやむやにして定数削減は順番が違う」

公明・斉藤氏:「企業団体献金の協議をすり替えるな。臨時国会での決定は乱暴」

維新はどうして閣内入りしなかったの？

矢継ぎ早の首脳日程

初外遊 ASEAN(マレーシア) →APEC(韓国) →G20(南ア)

就任直後から重要日程が続きます。

10/26～ マレーシアでASEAN関連会議

10/31～ 韓国でAPEC首脳会談

11/22～ 南アでG20首脳会議

10/27～29には米・トランプ大統領の来日が調整中

歴史の転機に出現する「高市」という名前



高市皇子（たけちのみこ）

持統天皇の時代の太政大臣

大海人皇子（後の天武天皇）の長男

（母は宗形徳善の娘、尼子娘）

壬申の乱のとき、近江大津京を脱出して父に合流し、軍事の全権を委ねられて活躍した。

大和国高市郡にて育った。
キトラ古墳か高松塚古墳の被葬者が
高市皇子とする説もある。

子孫は、高階氏

万葉集卷三一 一五八番

十市皇女が亡くなつた時の挽歌三首

山振之立儀足 山清水
酌尔雖行道之白鳴

一般的な読み

山吹の 立ちよそひたる 山清水
汲みに行かめど道の知らなく

意味

山吹が飾りを添えるように
ほとりに咲いている
山の泉の水を汲みに行きたいと思うけれど、
道を知らないのだ。

読み直し

山振れて 立つよき足の 山清水
酌み行くいえど 道の白鳴く

意味

巨大な山が揺れて見える。
しつかりと立っていようと思うけれど
すぐそこの山の清水を汲みに行くことさえ
涙と嗚咽でできないでいる

山振之 立儀足 山清水 酌尔雖行 道之白鳴

巨大な山が揺れて見える。
しっかりと立っていようと思うけれど、すぐそこの山の清水を汲みに行くことさえ
涙と嗚咽でできないでいる

このように読むと、この歌は、権力の歌ではなく「支える者の痛み」の歌とわかります。

持統天皇の下での編纂(『日本書紀』『万葉集』)を後押ししつつ、
日々の政務を淡々と担った高市皇子。

文化(万葉集)で心を、歴史(日本書紀)で記憶を共有し、
日本人のアイデンティティを整え、

中央が揺れても地域が自立して保てる国を目指しました。

“歌と記録で国を立てる”

これが日本的ガバナンスの原型となりました。

二人の「高市」が示す統治哲学

“速さ”と“芯”／改革と物語

いまの高市総理が直面するのは、

- 連立再編後の少数与党運営(法案可決の設計)
- 政治資金の信頼回復と政治改革の順序立て
- 外交・安保の一体運用(ASEAN／APEC／G20／米要人)

一方、古代の高市皇子が担ったのは、

- 政治の 芯 を整える作業(史書編纂と文化の共有)
- 地方と中央を結ぶ“**自立の網**”を編むこと

たいせつなことは、

国家の自立

地方の自立

個人の自立

国家／地方／個人—三つの自立

1. **国家の自立**…外交・防衛・通貨・エネルギー・食の基盤を自分で決められること。
2. **地方の自立**…地域が誇りと資源で立ち、中央の揺れに耐える力をもつこと。
3. **個人の自立**…情報の波に吞まれず、心で立つ。自分の暮らしを自分で選ぶこと。

高市皇子は、文化と歴史で“心の梁”をかけました。
高市総理もまた、心の改革で、現実の「梁」をかけてほしい。
「梁」が通れば、家は持ちます。

その家を照らすのが「あかり」。
きょう10月21日は、明治の電球から現代の政治まで、
灯りの意味を問い直す日でもあります。

結局のところ、政治も経済も文化も、たどり着く先は“**自立**”です。
でもそれは孤立ではない。

古代の高市皇子が歌と記録で結び、
現代の高市総理が制度と政策で結ぼうとしている。
どちらも『立って、つながる』——日本の姿です。

国家が自立し、地方が誇りを持ち、
一人ひとりが自分の足で立って生きる。

そこに初めて、本当の“**共鳴の政治**”が生まれるのです。